第六巻

73A　NKエージェント・外

雪が降っている。
車が一台通過。

74　NKエージェント・内

クリスマスの夜。
事務所の一角にクリスマスツリーがある。
テーブルの上に置かれた山盛りの骨付きチキンを食べている三人。
無言で、骨までしゃぶっている。

大　悟「・・（食べる）」
佐々木「・・（食べる）」
上　村「おいしい（食べる）」

大　悟「・・（食べる）」
佐々木「・・（食べる）」
上　村「・・（食べる）」

しばらくして、大悟が佐々木に尋ねる。

大　悟「旨いですか？」
佐々木「困ったことに」
大　悟「（ニヤリ）」
佐々木「あ、チェロ、持ってきた？」
うなづく大悟。
上　村「素敵、聞きたい！聞きたい！」
上村、骨を持ったまま、拍手する。
大　悟「じゃぁ、ちょっとだけ」
チキンの脂まみれの手を拭き、立ち上がり、チェロの準備を始める。
佐々木「生のチェロ聴くの初めてだ」

上　村「オーケストラにも入ってたんでしょう？」
大　悟「ああ‥でもすぐに潰れました」
上　村「いつからやってんの？」
大悟、チェロを持ちながら、事務椅子を引っ張ってくる。
大　悟「幼稚園の時から」
上　村「へぇ、そんな時から」
大　悟「これもその頃の子ども用なんですけど、オヤジから無理矢理習わされたんです」
椅子に座る大悟。
佐々木「洒落たオヤジだね」
大　悟「イヤ、最悪のヤツですよ。あの、小さな喫茶店をやってたんですけど、そこのウエイトレスと失踪してそれっきり……ホント、最悪なオヤジです」
上　村「今どうしてんだろうね」
大　悟「さあ。もう死んでるんじゃないですか」
チェロの弦を調整する。
大　悟「さ、何をやりましょうか？」
佐々木、上村にシャンパンを注ぎ、自分のグラスにも注ぎながら、
佐々木「そうだな、せっかくだから、クリスマスっぽいやつがいいな」
上村、シャンパンを飲みながらうなづく。
上　村「うん」
大　悟「（わざと真顔で）あのー、宗派とか問題ないですかね？」
佐々木「大丈夫、大丈夫。うちは仏教、キリスト、イスラム、ヒンズー、全部対応してるから」
くすっと笑う上村。
大　悟「（大悟もくすっと笑って）それじゃ、聖なる夜のために」
佐々木「一」
上　村「一」
大悟、チェロの演奏を始める。
曲は『アヴェ・マリア』（バッハ・グノー作曲）
雑然とした事務所に不似合いなチェロの美しい音色。
大悟は無心でチェロを弾く。
神秘的で官能的な美しい旋律に聴き入る佐々木。
上村の頬を、一筋の涙が伝う。

07.8/10版

「おくりびと」　巻別表

1	松竹タイトル・TBSタイトル　～　S#1　冬の庄内平野　白～FI 走るライトバン ～ S#13B　大悟の家　一階　：　朝食　NKエージェントの広告を見つける	M1～M5　／　第九	1652F-01K 18’21” 09K
2	S#14　NKエージェント・外　：　切抜きを手にやってくる大悟 ～ S#28　ＮＫエージェント・中　：　呆然としている大悟に「もう帰っていいよ」 S#29　走るバス　：　商店街を走るバス	M6～M8	1632F-11K 18’08” 11K
3	～ S#47　山麓の農家・外　：　「遅い！死んだ人間で食ってんだろ！」	M9～M11	1347F-04K 14’58” 04K
4	S#48　山麓の農家・中　：　佐々木の納棺作業 ～ S#60　ＮＫエージェント・中　：　「夕べはご苦労様」「全然違うのねあの人」	M12～M13	1551F-04K 17’14” 04K
5	S#61　商店街　：　山下親子と遭遇～「もっとマシな仕事につけよ」 ～ S#72　民家・中（菅原家）廊下　：　「女の格好してたって俺の子だ‥」	M14～M16A	1372F-10K 15’15” 02K
6	S#73A　NKエージェント・外　：　クリスマス　雪が降っている ～ S#81　山下家・居間　：　ツヤ子の納棺作業を行う大悟	M17～M18	1472F-06K 16’21” 14K
7	S#83　火葬場・祭壇前　：　平田は火葬場職員だった ～ S#89　大悟の家・外　：　父訃報の電報を受け取る美香	M19	896F-00K 9’57” 08K
8	S#90　NKエージェント・中　：　戻った大悟に「お父さん亡くなったみたい」 ～ S#99A　漁港・中　：　納棺～父の手に石が　～　白へＦＯ ＋　ローリングタイトル(4’12”) ＋　Ｃマーク　(5”)	M20～M22/子守歌	1819F-01K 20’12” 17K
本編		2時間06分11秒21K （＋　4分12秒） （＋　5秒）	11357F-13K （＋　378F-00K） （＋　7F-08K）
総計		2時間10分28秒21K	11743F-05K

画面ホワイトアウト

画面ブラックアウト

エンドタイトル

※　詳細は別紙
※　下画は黒バックで納棺作業をする大悟（ご遺体は自分の母）

Cマーク

75　納棺の風景、色々……（冬から春へと変わる）

チェロの音楽をベースにして、いくつかの納棺風景が描かれる。

×　×　×

雪の中を走るNKエージェントのライトバン。

上村の声「はい。NKエージェントです。いつもお世話になっております。明日ですね。　葬家のお名前は・・・・」

運転席の大悟と助手席に佐々木。

×　×　×

ある家（斎藤家）

美しい着物を着付けられたご遺体。
故人は上品な老婆である。
足袋を履かせる準備をしている大悟。

大　悟「それではこれより旅のお支度をさせていただきます」

大悟、遺族が足袋を履かせる手伝いをしている。

大　悟「指の方にかけていただいて・・はい、そうです、親指のところ・・」

声　「あの～」

大悟、振り返ると、故人の孫らしき女子高生がルーズソックスを手にして

女子高生「おばあちゃんが前に、ルーズソックス履きたいって」

大　悟「ああ・・（微笑んで）はい」

老婆の足にルーズソックスを履かせている大悟と女子高生。

大　悟「ふくらみの方はよろしくお願いします・・」

女子高生「はい」

まるで微笑んでいるかのような老婆の顔。

転調

Ave Maria : 1’26”
J.S.Bach/C.Gounod

M17:4’00”

化粧が済み、横たわっている故人。着物にルーズソックスの姿は微笑ましい。
棺の用意をしている大悟、見ると女子高生がおばあちゃんに、バイバイと手を振っている。

女子高生「おばちゃん、バイバイ」
親戚男「おばあちゃん、ごくろうさま」
大　悟「（優しい表情で見ている）」

×　×　×

ライトバンの走り

雪原を走るライトバン。
大悟がそのハンドルを握っている。
隣にもう佐々木の姿はない。
完全に一人立ちしているのだ。

×　×　×

集会所（太田家）

神　父「主イエス・キリストの御名によって、お祈りいたします。アーメン」
一　同「アーメン」

設えられた仮祭壇には十字架が置かれ、周りには故人（少年）の親戚や野球仲間が集まり見守っている。

棺の中の少年。
大悟、少年の胸元に十字架を添える。

棺の蓋を閉じる。

画面OL　×　×　×

←

微笑む少年大悟。
父の顔はまだぼやけている。

×　×　×

大悟、目の前にいる父の顔を一心に見続ける。

×　×　×

回想・川原

ぼやけていた父の顔がハッキリする。
少年だった自分に向ける父の優しい笑顔。

×　×　×

大　悟「（思い出す）」
横たわる父の顔をやさしく撫でる大悟。
大　悟「‥‥おやじ‥‥」
見守っている美香。
大悟（オフ）「おやじだ‥」
大悟、長い時間、父親の顔に触れている。
大　悟「‥‥おやじ‥‥」
やがて、両手を元のように合わせて胸元に置き、美香に向く。

←

微笑む美香。
大　悟「‥（泣いている）」
美　香「‥」
美香、小石を差し出す。
大　悟「‥」
大悟、石を持っている美香の手を優しく包み、
その手を美香のおなかに当てる。
さらにその上に美香の手が重なる。
二人、見詰め合って微笑む　一。

M22:4’58”

と　ー　小石が落ちる。
大　悟「！」
美　香「？」
小石を手に取る大悟。
大　悟「‥‥」
三十年前、自分が父親にプレゼントした石文だ。
大　悟「‥‥」
父を見る大悟。
今は何も語らない父の姿。
大悟、美香を見る。
微笑む美香。
大悟、小石を美香に渡して、父に向き直り、その顔に触れる。
大　悟「ーー」
大悟、何かを思いたち、綿花を切り分け始める。
じっとその様子を見つめている美香。
父の顔に含み綿をする大悟。
顔のゆがみを直していく。
じっと父の顔を見つめる大悟　ー（まだ思い出せない）
シェービングクリームを出して、父の顔に塗り、かみそりでひげを剃っていく。
父を見つめる瞳からこぼれる大粒の涙。
泣きながら、作業を進める大悟。
父親の顔は、安らかな表情に変わった。
その顔を見つめる大悟。
大　悟「‥‥」

M21:4'05"　　×　　×　　×

回想・大悟の家

チェロを弾く少年大悟。
見守る父の後姿。

回想・川原

石文を交換する少年大悟と父。

月光川

川沿いの土手でチェロを弾く大悟。

画面OL　×　×　×

田んぼの道

白鳥が田んぼで餌をつついている。
大悟の乗ったライトバンが停車し、その光景を見つめている大悟。

画面OL　×　×　×

月光川

チェロを弾く大悟。

画面OL　×　×　×

NKエージェント・内

ソファで寝ている佐々木。
上村と大悟がその姿を見ている。
上　村「社長も年とったわあ」
大悟、口に指をたてて「シーッ」とやり、そっと近づいて佐々木に毛布をかけてやる。
大　悟「‥‥」

画面OL　×　×　×

白鳥
山道

木々が芽吹き始めた山道を走るNKエージェントのライトバン。

画面OL　×　×　×

月光川

チェロを弾いている大悟。

画面OL　×　×　×

大悟の自宅・一階

散らかった室内。
大悟、一人でいい加減な食事をとっている。

画面OL　×　×　×

走るライトバンの中

おにぎりを食べながら運転する大悟

画面OL　×　×　×

月光川

チェロを弾いている大悟。

画面OL　×　×　×

ある家（奥山家）

ひな祭りの飾りがされた部屋。
頭の禿げた中年男性の顔剃りをしている大悟。（男性は仏衣ではなく、スーツを着ている）
大悟の手つき、表情には成長が感じられる。

大　悟「一（業者を見る）」
業　者「そろそろ、よろしいですか？」
大悟と美香、立ち上がり、横に移動する。
納棺作業を始める二人の業者。
しかし、その扱いは見るからに乱暴である。
業者、数珠をポケットから出し、簡単に手を合わせ、遺体にかけてある布団を乱暴にめくる。
業　者「あ、このまんま入れるかの」
業者B「はい」
業者は湯灌もしないで、布団ごと遺体を棺にいれようとする。
大　悟「！　あのぅ……」
業　者「はい？」
大　悟「僕にやらせてもらえませんか？」
業　者「いやいや、私たちがやりますから。棺に納めたあと、お水を飲ませてあげてください」
そして、
業　者「せえの」
と、布団を持ち上げようとしたところ、大悟が二人の業者を振り払う。
業　者「何すんだ！」
美　香「……夫は……納棺師なんです」
業　者「……」
大　悟「一」
美　香「……」
×　×　×

99A

父親の遺体の傍らに、立派な棺が置かれている。
大悟の愛情に満ちた仕事を、傍らで見守る美香。
夫の仕事の姿は、美しい。

手のストレッチをする大悟。
両手を離そうとすると、父の右手（グーになっている）に気付く大悟。
何かを握り締めているようだ。
大悟、父親の指を一本ずつ開いていく。

父親が安置された部屋に大悟と美香、組合員。

大　悟「そうですか」

組合員「無口でな～んも言わねぇ人だっけのう……いやぁ、良かった。身内の人が来てくれて」

一礼する組合員。

大悟と美香も頭を下げる。

組合員「もうすぐ、葬儀屋の人が来っからの」

大　悟「はい」

言って去る組合員。

大　悟「……」

美　香「……」

×　×　×

冷たくなった父の枕元にいる大悟。

少し後方に美香。

大悟、顔にかけられた白い布を取る。

30年ぶりに対面する父。

記憶の中の父と、現実の父はあまりにも違い、哀れに見える。

美　香「あなたの……お父さん」

大　悟「情けないけど……覚えてない」

美　香「？」

大　悟「親父の顔。こんな顔してたって、見ても分からないんだ」

傍らに、『小林淑希殿　所持品』とマジックで書かれた段ボールとかばんが置かれている。

大　悟「何だったんだろう、この人の人生って……50数年生きて、遺したものが段ボール一箱だけ」

美　香「‥‥」

そこに、組合員の声がする。

組合員の声「ここだ」

組合員が、棺を運ぶ葬儀業者の人間を二人案内して入ってくる。

組合員「よろしくの」

業　者「ええ」

舟

去っていく組合員。

業　者「お話中、失礼します」

業者B「失礼します」

業者は、父の荷物を足でどかし、そこに棺をどすんと置く。

棺に納められた故人の額に、その妻がキスマークをつける。

続いて長女がキスマークをつける。

笑い出す妻と娘たち。

孫の少女も、次女もつけて、故人の顔じゅうにキスマークがつく。

妻　「パパ‥‥ありがとう」

泣く母親をなだめる娘。

泣き笑い。

優しく見守る大悟。

画面OL　×　×　×

田舎道を――

葬列がゆく。

喪主は双子の弟（兄か？）の遺影を抱えている。

画面OL　×　×　×

ある家

祭壇の前で清らかな目差しで納棺をする大悟。

画面OL　×　×　×

月光川

←

チェロを弾いている大悟。

画面OL　×　×　×

鳥海山

越冬を終えた白鳥たちが、飛んでいる。
それは春の訪れの合図でもある。

76　大悟の自宅・外

コンビニの袋を持って帰宅する大悟。
鍵を出したものの、玄関の前にマットが干されてあり、ドアが少し開いている。
「まさか！」と思い駆け出してドアを開ける。

77　同・二階

入ってくる大悟。
美香が台所を片付けている。
大　悟「美香……」
美　香「掃除、してないの？」
大　悟「たまに」
美　香「嘘。一度もしてない」
大　悟「二回はやったぜ」
美　香「たまに、じゃないじゃない」
大　悟「（微笑む）」
美香、手を止めて大悟に向く。
美　香「やっぱり、私がいないとダメね」
大　悟「（微笑んで）」
美　香「‥‥報告もあるし」
大　悟「何？」
美　香「……赤ちゃんが出来た」
大　悟「！　すごい！　オレ、父親になるわけ？」
美　香「（頷いて）」

大

悟「（満面の笑み）」
美　香「（も微笑）」
美香、大悟に近づいて、
美　香「だから、もう中途半端な生き方は辞めて」
大　悟「（表情が変わる）」

大悟、上村に目で挨拶して出て行こうとすると、
佐々木「おい！」
大　悟「（立ち止まり、振り返る）」
棺の前の佐々木、大悟に向き直り、後ろを指差して言う。
佐々木「好きなの持ってけ」
大　悟「……」
美　香「‥‥」
微笑んで佐々木を見る上村。
佐々木「（にっこりとうなづいて）大丈夫」
大　悟「ー（微笑んで）」
会釈する美香。

97　海沿いの道

日本海に面した道をNKエージェントのライトバンが走っている。
荷台には、最上級の棺が積まれている。

98　車　　内

ハンドルを握っている大悟、助手席には美香が座っている。
大悟は何も語ろうとしない。
車は由良浜漁港集会所に向かう。

98A　由良浜漁港

大悟と美香の乗った車が来る。
組合員の声「今朝来てみたら突然死んでたがや。びっくりしてのう……どっから流れて来たんだかの、独りでこの街さ来てのう、一生懸命、港の仕事手伝ってくれたもんで、ここの番屋を、住居代わりに使ってもらってたがや」
集会所の前に着く2人が乗った車。

99　由良浜漁協集会所・内

かもめ

姿、見てあげてよ。ね。」
大悟、何も言わずに、出て行く。

95　同　・　外

大悟、事務所から飛び出すと……美香が立っている。
美　香「……」
大　悟「‥‥」
しかし大悟は、美香を振り切り、そのまま進む。
追いかける美香。
美　香「大ちゃん……」
それでも大悟は立ち止まらない。
足を止める美香。
何かを吹っ切ろうとしながら、ただ足を進める。
父親の影を完全に消し去りたくて、ただ足を進める。
が、けれども。
突然、大悟の足が止まる。そして……
目を閉じる。
大　悟「一」
大悟の後姿を見つめている美香。
美　香「……」
自分への苛立ちを他のもので押さえつけながら、
やがて目をあける大悟。
振り返り、事務所に向かって、一気に駆け出す。
美　香「！（微笑む）」

96　NKエージェント・内

勢いよく扉が開き、大悟と美香が入って来る。
佐々木と上村、二人を見る。
大　悟「社長……」
佐々木、何かを大悟に投げる。
大悟、受け取ると、それは車の鍵。
大　悟「‥‥」
佐々木「‥‥」
佐々木、デスクの方へ動く。

美　香「自分の仕事、子供に堂々と言える？」
大　悟「ーー」
美　香「きっと、イジメの対象にもなる」
大　悟「ーー（何かを言おうとしてさえぎられる）」
美　香「お金なんていらないから、三人で仲良く暮らそう」
大　悟「ーー（ため息）」
再び、二人の間に沈黙が訪れる。
考え込む大悟。
その時、携帯電話のベルが鳴る。
大　悟「はい、もしもし……あ、どうも。　　え？今からですか？」
美香が大悟を見る。
大　悟「……え！　……分かりました。すぐに行きます」
大悟、電話を切る。
大　悟「……」
美　香「こんな時に、仕事行くの？」
大　悟「銭湯のおばちゃん……亡くなった」
美　香「……」

78　銭湯・前（夕方）

「忌中」の紙が貼られている。

79　同・居間（夕方）

顔に白布を被せられて横たわっているツヤ子の遺体。
その傍らで、山下、理恵、詩織が座っている。
大中が手桶を置いて土間に出る。
土間、居間の入り口に立っている佐々木の横へ並ぶ。
大悟と美香が現れる。
大悟、佐々木に会釈して、ツヤ子の方を見る。
大　悟「……」
佐々木「？（美香を見る）」
大　悟「妻の美香です」
美香、ぎこちなく会釈をする。
佐々木「（軽く会釈を返し、ツヤ子の方を見て）薪を運んでる時に倒れて、そのまま亡くなったらしい」
大　悟「最後の最後まで働いてたんですね」

大　中「しかし、この銭湯が無くなっと、はあ〜、寂しくなんのう」
声に振り返る山下、大悟に気づく。
山　下「一」
会釈する大悟と美香。
山　下「一（軽くうなづく）」
大　悟「一」
佐々木、大悟を見る。
うなづく大悟。

80　同・脱衣所

平田、1人呆然としている。

81　同・居間

大悟、丁寧にツヤ子の足を拭いている。
その様子を見つめる山下家族と美香。
仏衣を広げ、着付けを始める大悟。
そのさまは愛情に満ち溢れている。
山　下「……」
美香、夫の作業を見つめている。
美　香「‥‥」
丁寧に、清らかに、真摯に作業をすすめていく大悟。
山　下「……」
理　恵「‥‥」
美　香「‥‥」

大悟、一連の作業を終え、数珠をかけようとしたとき、ツヤ子が
巻いていたスカーフが目に留まる。
大　悟「‥‥」
大悟、スカーフを手に取り、ツヤ子の首に巻いていく。
山　下「……」

大悟、ツヤ子の手に数珠をかけて、そっと両手を胸の上に置く。
見つめている山下。

M18:1’59”

美香の声「明日の朝、火葬するからって」

93　タクシー車内

美　香「お父さんのご遺体は、そこの集会所にあるみたい」

94　NKエージェント・内

大　悟「‥‥とにかく、戸籍からとっくにはずれてるし……。書類にもサイン
できない、って電話しといて。お願いします。ホントに」
美香の声「大ちゃん‥」
大悟、電話を切る。
上村、心配そうに見ている。
上　村「行ってあげて」
大　悟「ホント、大丈夫ですから」
上　村「お願い。お願いします」
上村、頭を下げて訴える。
大　悟「…？」
上　村「……私もね、帯広に捨てて来たの、息子を。6歳だった」
大　悟「！……」
佐々木「……（本から目線を外し、上村の方を見る）」
上　村「好きな人ができてね、ママ、ママ、って、泣き叫ぶ息子の、小さい手振
り払って、家飛び出した」
佐々木「……」
大　悟「……息子さんとは？」
上　村「会いたいに決まってるけど、会えない」
大　悟「どうして？　会いたかったら会いに行けばいいじゃないですか」
上　村「……（首を横に振る）」
大　悟「……子供を捨てた親ってみんなそうなんですか？」
上　村「……」
大　悟「だとしたら、無責任過ぎるよ=」
佐々木「……（本を閉じる）」
大　悟「……」
上　村「……（立ち上がり、大悟に近づいて）お願い、行ってあげて。最後の

第八巻

90　NKエージェント・内

ソファに寝そべって本を見ている佐々木。
デスクで頬杖を着いている上村。
大　悟「戻りました！すみません‥」
クリーニングしたものを手に戻って来る大悟。
上　村「大悟君、携帯忘れたでしょ？」
大　悟「はい？‥あ、家だ。すみません」
上　村「一お父さん、亡くなったみたい」
大　悟「誰の？」
上　村「あなたの」
大　悟「‥‥どういうこと‥‥ですか？」

91　タクシー車内

美香が携帯電話で大悟と話をしている。
美　香「それで、由良浜漁協にかけたら、教えてくれたの。お父さんの遺品の中に、うちの住所があったんだって」

92　NKエージェント・内

大　悟「でも、今さら父親って言われても……。30年以上も会ってないんだぜ。それに一緒に逃げた相手に面倒みてもらえばいいんだよ」

92A　タクシー車内

美　香「ずっと、お独りだったそうよ」

92B　NKエージェント・内

大　悟「……」

大　悟「それでは皆様で、お顔を拭いていただいて、おひとりづつ、お別れをお願いいたします」
綿花を水に浸し、山下に綿花を差し出す。
山下、戸惑いつつも綿花を受け取りツヤ子の顔を拭き始める。
急にこみあげてきたものを押しとどめるように、歯を食いしばる山下。
ふと、ツヤ子の手元に気づく。
あかぎれで傷んだ手元。
その手に自分の手を重ねる。
山　下「……母ちゃん‥」
嗚咽する山下。
山　下「‥‥」
ゆっくりと大悟の顔を見る。
大　悟「……」
山　下「……」
山下、綿花を大悟に差し出し、一礼する。

続いてお別れをする理恵と娘。
理　恵「お母さん‥」
じっとみつめている美香。
美　香「……」
理恵から綿花を受け取り、ふと美香を見る大悟。
美　香「……」
大　悟「……」
美　香「……」
美香、立ち上がり、ツヤ子の枕元に座る。
大悟、優しく綿花を差し出す。
両手で受け取る美香。
大　悟「……」
美　香「……」
大　悟「……」

第七巻

83　火葬場・祭壇前

小窓を開けられた棺の前に飾られた祭壇の前で、最期のお別

れをしている参列者たち。
悲しみに暮れている山下。
詩織を抱き上げ、棺の中のツヤ子に別れを告げる。
山　下「詩織、ばあば、お別れだよ」
理　恵「（泣きながら）お母さん‥」
大悟と美香の姿もある。
二人、順番が来て動く。
安らかなツヤ子の顔。
大　悟「お疲れ様でした」
手を合わせ、最期の別れをして棺から離れたとき、
大　悟「！（ハッとする）」
棺の近くに立っている火葬場の係員の制服を着た平田。
大　悟「こちらにいらしたんですか？」
平田、黙礼をする。
二人、平田の前を横切る。
平　田「……」
×　×　×
平　田「それでは皆さま、合掌でお送りください」
一同、合掌する。
合掌を終え、平田、棺のそばに動き、
平　田「お窓を、閉めさせていただきます」
山　下「一（軽く会釈）」
平田、小窓に手をかけ、観音開きの片方を閉じ、さらにもう片方を閉じようとして手が止まる。
平　田「……」
安らかなツヤ子の顔を見つめ、
平　田「ありがとの、また会おうの」
そう呟き、小窓を閉める。
×　×　×

83A

ツヤ子の棺が、平田によって火葬炉の中に入れられる。
閉じられる鉄扉。
その重い音。
山　下「……」
山下、突然動き出す。

小林和子様
死亡者氏名　小林淑希
死亡日時　18日ト時30分頃
小林淑希様の御遺体を引き取りに来てください
至急、ご連絡下さい
由良浜漁協　渡井利道　0237 ~

美　香「胎教のために、毎日弾いてくれる？」
大　悟「うん」
微笑みあう二人。
暖かいまなざし。

86　春の実景

桜の花が風に舞い散る。

89　同　・　外（別の日）

桜の花びらが舞っている。
美香が家から出てくる。
おなかに手をあてて、
美　香「いいお天気だね～」
花壇に水やりを始める。
そこにバイクに乗った電報配達夫が来る。
美香に近づいて、
配達夫「こんにちは」
振り返る美香、会釈をする。
配達夫「こちら、小林さんのお宅ですかの？」
美　香「はい」
配達夫「和子さん宛の電報です」
ブラームスの子守唄:22”
Brahms' Wiegenlied
美　香「え？」
配達夫「？‥　あー、いらっしゃいませんか、和子さん？」
美　香「あ‥いえ‥義母（はは）は、2年前に亡くなりましたけど」
配達夫「えー？　あー、そうですか‥」
美　香「あの‥ちょっとすみません」
美香、躊躇する配達夫の電報を取る。
うぐいす
配達夫「あ～、困ります～」
美香、そのまま封を開いて中を見る。
美　香「..」

電報の内容

うぐいす

山下に気づく大悟と美香、理絵。

84　同・火葬炉の裏

平田、点火ボタンの横に立ち、小窓から中の棺をじっと見つめている。
そこに山下が入って来る。
山　下「母ちゃんの最期、見てもいいかの？」
平　田「（静かに頷く）」
山　下「ありがとうございます」
小窓から中を見る山下。
平　田「たぶん人間、何か、予感がするんでしょうの」
山　下「？（振り返る）」
平　田「去年の暮れ、二人で、クリスマスやったのよ」
山　下「一」
平　田「まさかこの年になって、そげなことするなんて思ってねくて。でも、どうしてもやりてえっていうから、小っちぇえケーキ買って、蝋燭さ火つけて、二人で、お祝いしました」
山　下「……」
平　田「そしたら、突然、一緒に銭湯やってくれって、頼まれましての。」
山　下「！…」
平　田「つまりは、こういうことやったのやの。私、燃やすのは、上手ですからの（と笑って見せる）」
山　下「……」
平田、点火ボタンに向く。
山下、再び小窓から中を見る。
大悟と美香が二人の様子を少し離れたところで見ている。
平田、ボタンの方に向いたまま話し続ける。
平　田「長えこと、ここさいっと、つくづく思うのやの」
山　下「（振り返って平田を見る）」
平　田「死は、門だな、って」
山　下「……」
大　悟「……」
美　香「……」
平　田「死ぬっていうことは、終わりっていうことでなくて。そこをくぐり抜けて、次へ向かう……まさに、門です。私は、門番として、ここでたくさんの

うぐいす

M19:2’31”

人を送って来た。いってらっしゃい、また、会おうのう‥って、言いながら」

山　下「……」

山下、小窓に顔を寄せる。

大　悟「……」

美　香「……」

平田、無念そうに点火ボタンを押す。

ボッという不気味な音がして、ツヤ子の棺が炎に包まれる。

山下、手を合わせて

山　下「（泣きながら）母ちゃん＝‥母ちゃん‥」

平　田「一」

平田の目からこぼれ落ちる一筋の涙……

山　下「ごめんの‥母ちゃん‥ごめんの‥」

大　悟「……」

美　香「‥‥」

山　下「ごめんの‥ごめんの‥母ちゃん！‥ごめんの‥」

その炎に、大空を舞う白鳥が重なる。

真っ赤な空に向かって羽ばたく白鳥の群。

85　月　光　川

大悟と美香が川原にいる。

大悟、下を向いて何かを探している。

美　香「一何してるの？」

大　悟「よし、コレだ」

大悟、しゃがんで石を手に取り、そのまま石を握り締めてしばらく何かを念じるようにしている。

美

香「？」

大悟、やがて立ち上がり、美香に近づき、

大　悟「ハイ」

と、ただの石コロを差し出す。

美　香「何？」

大悟、美香の手に石を乗せて

大　悟「石文」

美　香「いしぶみ？」

大　悟「昔さ……人間が文字も知らなかったくらいの大昔ね。自分の気持ちに似た石を探して、相手に贈ったんだって。もらった方はその石の感触や重さから、相手の心を読み解く……たとえば、つるつるの時は、心の平穏を想像し、ゴツゴツの時は、相手のことを心配したりね」

大悟が美香にくれた石……それは、真っ白で真ん丸の石だ。

美香、それを握りしめ、何かを思って目を瞑る。

大　悟「一（見ている）」

美　香「（目を開けて）一ありがと」

大　悟「何を感じた？」

美　香「一内緒」

大　悟「（微笑む）」

美　香「素敵な話。誰から聞いたの？」

大　悟「……親父」

美　香「もしかして……あの大きな石も？」

大　悟「そう、親父からもらった」

美　香「知らなかった」

大　悟「毎年、石文を贈り合おうなって言ってたのに、結局あれ一回だけ。やっぱりひどい親父だ」

大悟、石を拾い、川に投げる。

86　庄内平野

すっかり春になっている。

桜の実景

87　大悟の自宅・外

庭の桜の花も満開に。

88　同・1階

お腹がやや膨らんだ美香が、椅子に座っている。

傍らに大悟、チェロで子守唄を爪弾いている。

（ブラームス「Wiegenlied」）

鳥